



柑橘歴史散歩・小蜜柑と温州みかん

みかんといえば、温州(うんしゅう)みかんのことを指しますが、明治の頃まで”みかん”といえば”小蜜柑(こみかん)”のことを指していました。この小蜜柑、今ではほとんど目にすることはありません。温州みかんも小蜜柑も、どちらも同じ”みかん”の呼び名ですが、一般にはあまり知られていない歴史があり、少し書きとめてみます。なお、小蜜柑は正式には紀州蜜柑(きしゅうみかん)といわれ、学名も *Citrus kinokuni* (しとらす きのくに) とされていますが、本編では小蜜柑と呼ぶことにします。

[蜜柑は小蜜柑]

江戸時代初期の頃、和歌山の商人、紀伊国屋文左衛門(きのくにや ぶんざえもん)が暴風雨について船でみかんを江戸に運び入れ、江戸っ子の喝采を浴びた話が知られています。当時、嵐のために廻船が動けず、江戸では鍛冶屋の神様をお祭りする”ふいごう祭り”に配るみかんが不足して、値段が高騰していました。一方、上方では、江戸へ送るみかんの荷が滞って市中にあふれ、買い叩かれていたというのです。



小蜜柑の樹 (今治市大三島)

この時、運ばれたみかんが小蜜柑であり、今の温州みかんではないのです。

小蜜柑は、正月のお飾りに使う、葉付きの小さなみかんを考えて頂ければよいでしょう。種があり、甘味のある小さなみかんです。大きさは 30 ㍎ほどで、温州みかんの 1/4 くらい。

本蜜柑、眞蜜柑、三月蜜柑、紀の国蜜柑、八代蜜柑、桜島蜜柑などと呼ばれたみかんも、みな小蜜柑です。

[温州みかんは李夫人]

蜜柑が小蜜柑なら、温州みかんは何と呼ばれていたかといえば、これが李夫人(りうりん又は りふじん)という何とも妖艶な名前がついていました。なぜ中国の女性の名前なのか、気になるところですが、残念ながらその詳しい記述はなく、今となっては知りようがありません。

ただ、李夫人といえば、古代中国の漢王「武帝」が愛した女性にその名があり、白居易の詩には「玉膚柔らかく快く、吹く気は蘭に勝る。芝生殿において廻風の曲を唄えば庭中に花香翔び落つ」と、絶世の美女だったようです。

温州みかんが優れた美質を備えていたので、名づけられたのかもしれませんが。作物に女性の名がつけられるのは、橘(たちばな)に湘水夫人があり、みかんにクレオパトラの名があるように、さほど珍しいことではありません。

[李夫人は日本生まれ]

李夫人(=温州みかん)という名からすると中国から伝わった果実のようですが、じつは日本原産の柑橘です。鹿児島県出水郡にある長島という天草に面した島が発祥の地とされ、種(たね)から生まれた変異種と考えられています。

長島では温州みかんのことを李夫人(りうりん)と呼び、愛媛でも温州みかんが最初に入った立間でも、やはり李夫人(りうりん)と呼ばれていました(右写真)。

ほかに、李婦人、じゅくじん、竜神などの呼び名もあり、大蔵永常が著した広益国産考(1859)には、次のような記述があります。

「李夫人と、西国で種無蜜柑といわれるものとは、少しの変わりが無いものの、種無蜜柑のほうが李夫人より味がよく、全く種がない。李夫人も美味だが、少し酸味があり、種が一つ二つ含まれる」。種無蜜柑は、李夫人から生まれたようにも思えますが、小蜜柑にも種無があり、どちらかは分かりません。



みかん研究所にある李夫人(温州みかん)の記念碑と立間に伝わった原木の後継樹(右隅)



李夫人すなわち温州みかんは、英語で **satsuma mandarin**(さつま まんだりん)と呼ばれます。

明治 9 年にアメリカのフロリダへ導入した際、苗が原産地の鹿児島から運ばれたため、薩摩の名がついています。また、その後、苗の多くが尾張の種苗産地からアメリカに送り込まれたことから、**Owari satsuma** (おわり さつま)とも呼ばれました。(岩政正男氏)

[李夫人の誕生]

「桂園橘譜」(1828)には、「筑後柳川に橘(たちばな)あり、太閤による朝鮮出兵の際、柳川侯が持ち帰ったもので、李夫人橘(りふりん)という」とあります。さらに、「本草図譜」(1830)にも同様の記述があり、朝鮮から持ち帰ったかどうかは別にして、筑後には文禄・慶長の役があった 1600 年前後に温州みかんが伝わったようです。

これに対して、昭和 11 年に鹿児島県出水郡・長島の鷹巣で見つかった李夫人の古木は、発見当時、樹齢 300 年といわれ、その成り立ちは 1600 年頃。しかも、古木は接木で育てていたため、元の親木は先の柳川における伝来の時期より古く、柳川の李夫人橘は長島から伝わったものと考えられています。

長島は、交易船が往来した八代海に面する島で、かつては天草領であった仲島のこと。肥後や肥前では、温州みかんを”大仲島”や”中島”とも呼んでいたといい(岩政正男氏)、李夫人は戦国時代の 1500 年代には、作られていたように思えます。

ただ、福岡藩の宮崎安貞が著した農業全書(1697)には、橘(みかん)や柑(くねんぼ)の名はあっても、李夫人の名がありません。明治の頃まで、みかんは主に土産や贈答用の品であり、美味しい果物であったにも関わらず、種が無い又は少ないことが好まれなかったのです。李夫人が広がるには、かなりの時間がかかったようです。

[温州みかんへの改名]

李夫人が日本原産の”みかん”なのに、なぜ、温州みかんと呼ばれるのでしょうか。

温州といえば、中国浙江省の温州府を指しています。

南宋の韓彦直が著した「橘録」(1178)には、『柑橘は蘇州、台州に出ず。西は荊州に出で、南は閩・広・撫州に出ず。みな、温州のものの上と為すに如かざるなり』と、みかんは温州府の産が最上とたたえています。



温州みかん

「和漢三才図絵」(1712)でも『温州橘は蜜柑である。温州とは浙江の南にあって柑橘の名産地である』とし、「桂園橘譜」(1848)にも柑橘の種類に温州橘をあげて、その味の良さは蜜柑に優れると記しています。温州という名は、美味しいみかんの代名詞なのです。

明治になって、国では統計上、名前がバラバラなみかんを整理する必要ができたのでしょう。小蜜柑を普通蜜柑とし、李夫人を温州みかんとしています。有職故実に長じた人がいて、温州府のみかんに劣らぬ美味しさから、温州みかんと言ったのでしようが、温州府から伝わったみかんではないのです。

[小蜜柑の伝来]

さて、小蜜柑に話を戻して、その発祥をたどってみます。

小蜜柑には、景行天皇が熊本へ行幸された際、種子を与え、小天(おあま)村水島に植えさせたという、伝承が残されています。



田道間守の肖像画 (みかん研究所所蔵)

さらに、「日本書紀」には、景行天皇の一代前にあたる垂仁天皇の命を受けた田道間守(たじまのもり)という人が、常世(とこよ)の国に非時香菓(ときじくのかぐのみ)を求めて旅立ち、10年の歳月を経て持ち帰ったとあります。非時香菓は冬でも実をつける柑橘もしくは厳冬期でも手元にある果実という意味でしょうか。

帰国した田道間守は、直前に垂仁天皇が崩御されたことを知り、帝の神霊に頼って無事かえり着いたのに会うことができず、悲嘆にくれて自死してしまいます。次の帝の景行天皇は、田道間守の忠誠を憐れみ、垂仁天皇の陵墓の傍に埋葬を命じたとあり、持ち帰った非時香菓が橘(たちばな)であると記されています。

橘(たちばな)は日本原産の柑橘であり、わざわざ田道間守が海外まで探しに行く必要はなかったでしょうから、橘を柑橘類の総称とすると、非時香菓(ときじくのかぐのみ)は、日本への伝来時期が不明な小蜜柑や橙(だいたい)ではないかといわれています。しかも、伝承のように景行天皇が、田道間守の帰国後に、小蜜柑の種を熊本に植えさせたとすれば、非時香菓が小蜜柑であった可能性は高くなります。

しかし、小蜜柑がその当時に伝わっていれば、その甘美な味から各地で栽培が広がったでしょうし、空海が812年に嵯峨天皇に献上した果実は、柑子(こうじ)ではなく、小蜜柑でもよかったです。小蜜柑説には少し無理があるように思えます。ちなみに、柑子は日本に古くからある寒さに強い柑橘で、果実は濃い黄色で果皮うすく、大きさは40gほどの小果です。聖武天皇の時代(725)に唐から伝わったことが、「続日本書紀」に記されています。

非時香菓には、ほかに橙や橘であったとする説もありますが、残念ながら、いずれも決め手がありません。加えて、小蜜柑が植えられた場所も熊本県のほか、田道間守を祭神とする和歌山県の橘本神社や佐賀県にも伝承があり、非時香菓の種を与えた景行天皇が日本武尊(やまとたけるのみこと)の父だという神話に近い時代の話だけに、伝承を裏付ける術はなさそうです。

[愛媛の小蜜柑点描]

愛媛の小蜜柑については、大三島にある大山祇神社の大祝(おおほおり)職の三島氏が、旧暦の11月に小蜜柑を領主の河野通直に献上し、通直から

『みつかん ひとしお ひとしお 祝着に候』との礼状が送られています。

蜜柑のことは『みつかん』とよばれ、そのうち『つ』が略されて『みかん』になるのですが、三島氏にはもう一通、河野通直からの礼状があり、そこでは『みかん』と書かれています。この文書は、ちょうど『みつかん』から『みかん』に変わる過渡期のものと言えそうです。

当時の蜜柑は、病人の口にあう貴重な果実であったらしく、『童(わらべ)らが病気で床についており、ありがたい』とあります。文書が書かれた時代は、室町時代後期の1540年頃ではないかと思われるのですが、特別な果物とされているだけに、小蜜柑が作られ始めてさほど年月が経っていないように思われます。



愛媛県今治市上浦町の小蜜柑



同左の小蜜柑

瀬戸内の大三島や大島には、いまも当時をしのばせる小蜜柑の古木が残っており、航海が主な交通手段であった時代に、瀬戸内の島々を拠点とした倭寇(わこう)や水軍が持ち帰ったり、交易船が風待ちのために立ち寄るなどして、小蜜柑などの柑橘が伝わったのでしょう。

そのため、島嶼部には、自然に交配してできた柑橘が多くあり、安政柑や八朔などもその類(たぐい)です。因島に入った幾つかの種類が自然交雑してできたと言われています。



八 朔

三島氏の文書から 50 年ほどのちの、北宇和郡三間地方で著された「親民鑑月集」(1564)には、柑橘の種類に「柑子(こうじ)、九年甫(くねんぼ)、檳柑(みかん)、柚(ゆ)、橙(だいたい) …」など 8 種をあげ、そのほかにも種類は多いと書かれています。檳柑は小蜜柑のことであり、呼び方も『みつかん』ではなく『みかん』になっています。

『柑橘類は武家や寺院などで植えてもよいが、農家は柚子と橙のほかは作る必要がない』といい、『ただし、販売して売れるならば話は別』とも言っています。柚子と橙は食酢用として、屋敷のまわりで自家用に作って良かったのでしょう。ほかの柑橘は、流通すれば商品になると考えられていたようです。

江戸時代の時期は不明ですが、喜多郡や伊予郡の一部を領した大洲藩主に、庄屋たちが小蜜柑を献上しています。下唐川や下須戒、松尾、知清といった山間部から、小蜜柑が献上されているのです。蜜柑の栽培は、海岸線の暖かい地域が適しているのですが、内陸部でも南向きの日当たりの良い土地を選んで、作っていたのでしょう。

明治 21 年に作られた愛媛県の柑橘統計では、県内のみかん生産量 3,504 石のうち北宇和郡が 1,930 石、喜多郡が 1,097 石と 2 郡で 8 割以上を占めています。今では想像しにくいのですが、大洲藩領の喜多郡は、県内でも有数の小蜜柑産地だったのです。

江戸時代の百科事典である「和漢三才図絵」(1712)には、蜜柑の産地として、『紀州有田 薩州桜島、豫州松山、駿州、肥後八代をあげ、豫州松山産は駿州産より美味』と書かれています。

愛媛のみかんが有名になったのは、明治 17 年に立間の李夫人(=温州みかん)が東京の全国重要物産共進会で一等賞をとり、翌 18 年にも大日本農会の全国農産物品評会で一等賞をとって好評を博す以前、すでに江戸時代から美味しい蜜柑産地として知られていたのです。

小蜜柑は、熊本から鹿児島、大分、愛媛、広島、和歌山、静岡へと航路に沿って広がり、しかも、多くが現在の温州みかんの産地と重なっており、小蜜柑の歴史が今を支えているのかもしれない。

[小蜜柑の史書への登場]

明治の中頃まで、小蜜柑はみかんと呼ばれていましたが、そもそも、みかんという言葉はいつ頃から使われ始めたのでしょうか。蜜に漬けたように甘いことからみかんと呼ばれたようですが、蜜橘や檳柑など様々な字が充てられ、最初に史料にみられるのは 1418 年、

後崇光院が仙洞へ蜜柑二合を贈った記述です。つづく史料には、『病気中の室町殿が蜜柑を欲しがるので蔵光院の蜜柑を 100 個もらって献上し、足りない分は柑子(こうじ)を加えた』とあり、蜜柑は室町殿(將軍)が欲しがると貴重な果実だったのです。時期的には、対明貿易を盛んに行った足利義満の次の將軍の時代であり、小蜜柑のような甘い果実が作られていたようです。

しかし、その後しばらくして、蜜柑の字は史料から消え、前述の三島氏の文書が書かれた 1540 年頃まで空白期間が続きます。そして三島文書のあと、すなわち 1500 年代中期から、頻繁に史料に登場してくるのです。

つまり、小蜜柑が蜜柑として世の中に知られ始めたのは、室町幕府の権威がおとろえ、伊予の国では河野通直(1509 年領主)が活躍し、因島・能島・来島の村上氏らの三島水軍が九州や海外で活発に動いていた時代と符号し、少なくとも今から 500 年以上前と考えられるのです。

〔参考資料〕

安部熊之輔(1904):日本の蜜柑. 明治農学全集 果樹

愛媛県果樹園芸史(1968):愛媛県青果農業協同組合連合会

村上節太郎(1967):柑橘栽培地域の研究

岩政正男(1979):作物品種名雑考・柑橘. 農業技術 34(9)409-413

古事類苑:国際・日本文化研究センター

大蔵永常(1859):広益国産考. 日本農学全集,(社)農山漁村文化協会

宮崎安貞(1697):農業全書巻六~巻十一,日本農学全集,(社)農山漁村文化協会

郷土誌資料第 1 集の 1 産業編 吉田町立間公民館

菅 菊太郎(大正 4 年):伊予における古き蜜柑の栽培地.伊予史談第 1 巻 4 号

大洲藩領史料要録.村々庄屋旧家献上物覚:伊予史談会

親民鑑月集 和名類聚楽抄 和漢三才図会 魏志倭人伝 古事記 日本書紀

〔愛媛県農林水産研究所 HP. Ikegami〕